

# 特別支援教育における探究的な学びの体系化と 教育カリキュラムへの展開

◎中村 昌宏（東京学芸大学附属特別支援学校）  
○岩井 祐一（東京学芸大学附属特別支援学校）  
溝江 有里子（東京学芸大学附属特別支援学校）  
菊池 優貴乃（東京学芸大学附属特別支援学校）  
小田 滋大（東京学芸大学附属特別支援学校）  
奥住 秀之（東京学芸大学特別支援科学講座）  
代表者連絡先：mnakam@u-gakugei.ac.jp

【キーワード】 探究的な学び，知的障害教育，カリキュラム・マネジメント

## 1 はじめに

現代社会においては、正解が一つに定まらない課題に向き合い、多様な情報を吟味しながら自ら判断していく力が求められている。検索や生成 AI によって答えらしきものが瞬時に得られる時代である一方、誤情報や価値観の対立に直面する場面も増えており、与えられた知識を再生するだけでは十分ではない。知的障害のある幼児児童生徒においても、身近な経験を自分事として受け止め、問いをもち、他者と関わりながら意味や価値を見いだしていく学びが重要である。

他方で、知的障害教育では、学習で得た知識や技能が断片的になりやすく、学んだことが次の場面に活用されにくいという課題がある。経験がその時間限りの点として終われば、生活や社会参加に接続する学びとして残りにくい。したがって、興味や関心を出発点としつつ、経験を振り返り、整理し、意味付け、次の学びや生活に接続する意図的な授業設計が必要である。

本校ではこれまで、「主体的・協働的な学び」、「QOL（生活の質）」、「言語コミュニケーション支援」等の研究を蓄積してきた。本プロジェクトでは、これらの蓄積を「探究的な学び」という観点から再整理し、幼稚部から高等部までを貫く学校全体の共通基盤として構築することを目指した（図1）。

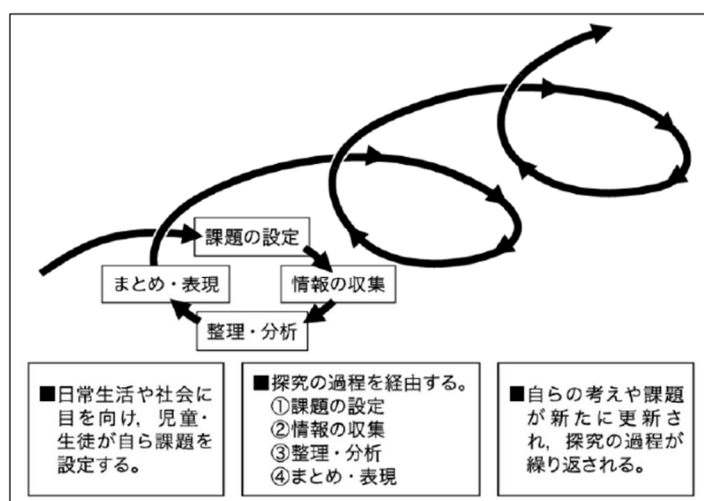


図1 探究的な学習における児童生徒の姿

## 2 本プロジェクトの目的

本プロジェクトの目的は、知的障害のある幼児児童生徒が、問いをもち、調べ、他者と関わりながら意味や価値を創り出していく探究的な学びを、幼稚部・小学部・中学部・高等部を通じた実践として整理し、その知見を学校全体で共有可能なモデルとして理論化することである。

本研究では、探究的な学びの過程を「課題の設定—情報の収集—整理・分析—まとめ・表現」と捉えつつ、これを一律の手續として当てはめるのではなく、発達段階や実態に応じて具体化することを重視した。すなわち、幼稚部では「好き」「おもしろい」といった感覚的な反応、小学部では「やってみよう」という試行や体験、中学部では「どうなるかな」「なんでだろう」という問いの芽生え、高等部では「なぜ」「どうすれば」という社会的課題への問題意識へと、学びの深まりを縦断的に捉える枠組みを構想した（図2）。

あわせて、学部ごとの実践記録、教材や支援方法の整理、ICTや生成AIの活用可能性の検討、研究協議会による成果発信を進め、二年次以降の単元開発や教材化、ツール化につながる基盤づくりを行った。

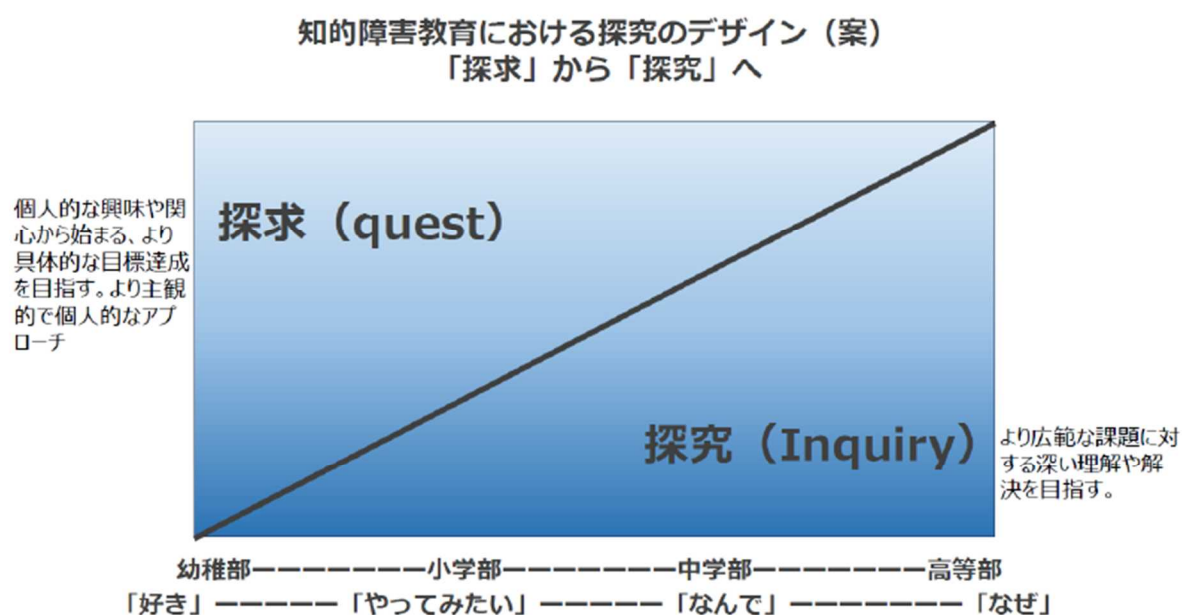


図2 知的障害教育における探究のデザイン（イメージ）

## 3 本プロジェクトの実施

### 3.1 全校での共通整理

本年度は二か年計画の一年次として、まず各学部における探究的な学びの姿を再整理した。カリキュラム・マネジメントの観点から、教育課程の中で探究的な学びがどのように位置付くかを確認し、探究の過程、支援の在り方、記録や評価の観点を全校で共有できるよう検討した。

また、各学部の実践をもとに、探究的な学びを促す題材設定、教師の関わり、言語活動、ICT活用の観点を抽出し、ミニ事例集化に向けた記録を進めた。探究を支える情報活用能力や振り返りの方法についても検討し、学校全体で改善循環を回す体制づくりを図った。

### 3.2 学部ごとの実践

幼稚部では、「幼児の『好き』を広げる支援」を研究主題とし、探究的な学びの出発点を、幼児が日常の遊びや生活の中で示す「好き」「おもしろい」「やってみよう」といった反応に求めた。実践では、「朝の集まり」における活動の選択や各期の振り返りを通して、幼児一人一人の興味・関心の変化を丁寧に見取り、実態把握、題材選び、環境の構成を往還しながら支援を構成した。特に、5歳児が楽しんでいる姿が4歳児に伝わり、遊びや活動への参加

が広がる「響き合い」を重視したことにより、個の「好き」が集団の活動へと広がっていく過程が確認された。これにより、幼稚部段階における探究的な学びは、問いを言語化する以前の、気づき、試す、関わる、表すといった遊びの過程そのものに内在していることが明確になった。

小学部では、「児童のエピソードを手掛かりに省察を深め、探究的な学びを促す授業実践のあり方を明らかにする」ことを目的とし、探究的な視点から小学部の授業づくりを捉え直した。研究では、これまでの学部での学びを再整理した上で、児童の姿やキーワードをもとに、小学部段階における探究的な学びを、「題材の設定・教材の選定」から「課題との出会い」、「情報のインプット」、「学習のアウトプット」、「自己の変容」、「他者への表出」へとつながる一連の過程として整理した。実践題材としては、国語・算数の劇あそび「おおきなかぶ」、図画工作における大豆料理を題材とした立体造形、調理学習「自分のお弁当を考えよう」等を設定し、児童が見たい、触れたい、作りたい、伝えたいという思いを基盤に学びを展開した。その結果、児童の表情、発語、身体の動き、友達との関わりなどを学びの表出として捉える視点が共有され、授業改善に向けた省察が深まった。また、教員間でエピソードを検討することにより、同じ児童でも多様な見取りがあることや、長期的な成長の文脈で授業を構成する重要性が確認された。

中学部では、総合学習において既に取り組んでいた探究的な学びのサイクルを踏まえつつ、本年度は特に「情報の収集」に焦点を当て、その手立てとして「インタビュー」を位置付けた。従来は、体験を基盤としながら書籍やインターネットによる調べ学習が中心であったが、情報収集の選択肢を広げるため、国語科の学習の中でインタビューに必要な資質・能力を育成する実践を行った。実践では、生徒の実態を3段階に整理し、4月のプレテストを基に学年混合・縦割りのグループを編成した上で、テーマの選定、インタビュー相手、質問内容の検討、準備、質問の態度、ふりかえり・まとめの6観点から段階的な目標を設定した。こうした構造化により、教師と一緒に活動する段階から、視覚的支援や選択肢を用いて主体性を引き出す段階、さらに自分で質問を構成しやりとりを進める段階へと、学びの筋道を明確にすることができた。成果として、総合学習の視点から探究学習を再整理できたこと、「インタビュー観点×段階評価表」を作成できたこと、授業実践記録を蓄積できたことが挙げられる。また、実践場面では、同じ空間・同じ方法で繰り返し取り組む環境の構造化によって、生徒が手順を理解し、自発的に活動する姿が見られたほか、本人が聞いてみたいことを尊重した質問づくりが、活動への意欲の向上にもつながった。

高等部では、社会的自立に向けた「進路学習」を探究の場として位置付け、現場実習や校内実習の経験をどのように整理・分析し、自己理解や将来像の形成につなげるかを中心課題とした。高等部の進路学習は、現場実習目標の設定、校内実習、実習先からのコメントの整理・分析、現場実習報告会という流れで構成されており、本年度はこのうち「整理・分析」の過程を充実させるための支援方法を検討した。具体的には、実習先からの評価コメントについて、賞賛と指摘が分かりやすく伝わるよう文末表現をフォーマット化し、さらに色マーカーを用いて褒められた点と注意された点を視覚的に整理した。また、捉えにくい表現については教員が分かりやすく言い換え、Google レンズの音声読み上げ機能を活用して文章理解を補助した。加えて、スクール AI を用いて複雑なコメントを生徒の理解しやすい形で整理・分析する実践も行った。これらの支援により、生徒は実習先のコメントから成果と課題を見いだしやすくなり、自分の経験を自分事として捉え直す姿が見られた。さらに、クラゲチャート等の思考ツールを活用しながら、「どのような大人を目指すか」「そのために何を頑張るか」を考える学習へとつなげることで、進路学習を自己理解・自己選択・自己決定へと接続する探究的な学びとして再構成することができた。

### 3. 3 研究協議会による発信

本年度の研究成果は、研究協議会や学会等で発信した。研究協議会では200名を超える来校者を迎え、公開授業、研究協議、講演等を通して成果と課題を共有した。

参加者アンケートでは、「職場等で活かせる」とする回答が97.8% (n=135) であり、講演①97.1%、講演②93.6%、全体会 93.3%、公開授業 90.3%、分科会 82.8%の満足度が示された。

## 4 課題（又は成果，提言，提案等）

本プロジェクトの成果の第一は、幼稚部から高等部までを通した探究的な学びの縦断的な見取りを、学校全体の共通言語として整理できたことである。幼稚部の「好き」の広がり、小学部の課題との出会いと表出、中学部の情報収集としてのインタビュー、高等部の整理・分析を核とした進路学習というように、各学部で探究の重点は異なるが、それらが発達段階に応じて連続していることが明確になった。

第二に、探究的な学びを支える支援方法として、エピソード記述、評価表、視覚化、読み上げ、言い換え、生成 AI 等を、単なる技術導入ではなく、理解や表現を支える教育的手立てとして位置付けることができた。特に中学部・高等部では、ICT や生成 AI の活用が、生徒の困難さを補う補助線として有効に機能しうることが示された。

第三に、研究過程そのものが教員の授業観の更新につながったことである。幼稚部では子供の反応の見取り方、小学部ではエピソードを起点とした授業改善、中学部では段階評価表を用いた共通理解、高等部ではコメントの読み取りや整理・分析を支える手立ての検討が進み、各学部で教員が子供の学びをより具体的に捉え直す契機となった。

さらに、本研究の成果は大学・附属学校・公立学校への応用可能性を有している。大学においては、発達段階ごとの探究の見取りや、ICT・生成 AI を支援として位置付ける授業設計の視点を、教員養成における教材研究や教育実習指導に取り入れることができる。附属学校においては、学部間接続を意識したカリキュラム・マネジメントを進めるための共通枠組みとなり、公立学校においては、インタビューを核とした情報収集、評価コメントの平易化、ポートフォリオによる振り返り等が授業改善に資することが期待できる。

また、本研究は、探究的な学びを『自由に任せる学び』として捉えるのではなく、必要な支援を組み込むことで学びへの参加を保障する視点を明確にした点にも意義がある。知的障害教育においては、問いの立て方、情報収集の仕方、整理・分析の手立て、表現の媒体が、児童生徒の実態によって大きく異なる。だからこそ、教師が環境を構成し、見通しを示し、言葉や記録の方法を支えながら、本人が自分の学びとして実感できる形へ整える必要があることが、学部横断的に確認できた。

一方、課題も明らかになった。幼稚部では「好き」をさらにどのように深め、小学部段階の探究へ接続していくかが課題である。小学部では、学年や学部をまたぐ長期的な学びのつながりをどう捉えるか、また一人一人の探究的な学びをどのように評価するかが課題として残った。中学部では、段階評価表の細分化や観点の見直し、デジタル上での練習を実際の対面場面へ接続する工夫が求められる。高等部では、言語理解を支える支援と、思考過程を可視化する支援を継続的に精査する必要がある。

二年次に向けては、本年度の成果と課題を踏まえ、探究的な学びの実践モデルとして広く教育現場に還元できる形へ発展させることが必要である。具体的には、学部間の接続を意識した単元・プロジェクトの開発、実践知の教材化・ツール化、ポートフォリオ等を活用した記録と評価の充実、教員研修への位置付け等を進めたい。

今後は、幼小中高の実践をポートフォリオ的に接続し、子供の興味の変化、問いの深まり、表現の広がりを継続的に記録できる仕組みづくりも重要である。知的障害教育における探究的な学びを、子供一人一人の生活と社会参加につながる学びとして具体化し、広く教育現場に還元していくことが、今後の研究課題である。

### 附記

本研究の成果は、令和 7 年度東京学芸大学附属特別支援学校研究協議会において公開授業・研究協議・講演として公表するとともに、関連学会等でも発信を行った。研究協議会で得られた外部参加者からの意見は、二年次の単元開発や評価方法の改善に生かしていく予定である。

本年度は土台づくりの段階として、各学部の実践を横断的に整理し、探究的な学びを捉える視点と支援の方向性を共有した。今後は、この成果をミニ事例集や教材、研修資料等として再構成し、附属学校のみならず広く教育現場で活用可能な形へ発展させていく。